

乃木自殺と教育界

久 木 幸 男

General *Nogi's* Suicide and Its Influences on the Educational World

Yukio HISAKI*

SUMMARY

General *Nogi's* suicide (1912), one of the greatest events in the earlier part of 1910's Japan, gave a shock to Japanese society, especially to the educational world, which had come to a serious deadlock.

Nogi's death was followed by the admiration for him, in which the educational world involved, too. One of the educational problems about *Nogi's* death was how his suicide should be taught in the class-room, because suicide in general was undesirable, but *Nogi's* must be admired. This problem was solved in an ambiguous way in which teachers, neglecting *Nogi's* suicide, should give lectures on his episodes that constituted "*Nogi* myth". "*Nogi* myth" was adapted from "*Nogi* legend" in which *Nogi* had sometimes been an object of mockery. This myth, accompanied with the deification of *Nogi*, paved the way to the militaristic trend in Japanese education 1920's after.

序

最近の日本教育史研究の大勢は、「学界の関心は依然として近代に集中している¹⁾」といわれる状況がつづいており、その中でも明治前半期と大正デモクラシー期とが、関心集中のピークをなしていることは、周知のとおりである²⁾。大正デモクラシー期に先立つ 1910 年代前半については、大正新教育運動の胎動期として関説されることはあっても、その時代固有の教育問題あるいは教育状況を、それ自体としてとり上げて分析しようとする試みはほとんどなされていないようである。しかしいわば「忘れられた時代」と化しているこの時期は、忘れ去られるに価するほど平穏無事な時代ではけっしてなかった。明治 43 年 (1910) の「大逆」事件、第 2 期国定教科書の使用開始、帝国在郷軍人会・帝国農会の発足、明治 44 年 (1911) の南北朝正閏問題、明治 45 (大正元) 年 (1912) の三教会同、大正 2 年 (1913) の護憲運動、大正 3 年 (1914) の京大沢柳事件など、毎年のように注目すべき出来ごとがつづいている。

この小論でとり上げようとする陸軍大将・乃木希典の自殺 (1912) もまた、上記におとらず注目に価する事件の一つである。明治天皇の死に殉じたといわれる一軍人の自殺を、

* 教育学教室 (Dept. of Education)

教育史的に注目すべき事件に数えるのは、一見奇異に感じられるかもしれない³⁾。しかし乃木の自殺は、当時「教育上の一論題」として「諸家の説」が教育ジャーナリズムをにぎわただけでなく⁴⁾、教育界がこの自殺によってうけた影響は、思いのほかに大きいものがあった。その上、乃木を「嘲弄のためのシンボル⁵⁾」たらしめる要素を多分に含んでいた生前の乃木伝説は、自殺を契機に乃木神話に昇華して行くが、この「神話」は、天皇制教育の転回過程——明治の絶対主義天皇制教育から、臨時教育会議以降の、より軍国主義化した教育への——において、かなり重要な一齣をなしているのである。

乃木は現在ではほとんど忘れられた人物である⁶⁾。たしかにかれの生前の行動は、忘れ去られるにふさわしいものにすぎないかもしれない。しかしかれの自殺が直接、間接に教育界に与えた影響が、上記のごとく広くかつ深いものであったとすれば、その教育史的検討は当然なされなければならない。この小論ではこうした見地から、乃木の自殺に対する教育界を中心とする対応状況を明らかにし、乃木神話の形成とその教育史的意味を考察したいと考えるが、それに先立って、1910～12年ごろの教育状況に簡単にふれたいと思う。乃木自殺への対応も、乃木神話の形成も、当時の教育状況と切り離しては考えられない問題だからである。

注

- 1) 堀松武一「日本教育史学界情報」(1968年度)『日本の教育史学』第12集, p. 204)
- 2) 一例として1970年度の日本教育学会における、日本近代教育史関係の研究発表状況をあげると、総数9のうち、明治前半期を扱ったものが5、大正新教育期をとり上げたものが2であった。
- 3) 乃木自殺と教育との関係は、これまでほとんど論じられていない。大浜徹也氏は、「小学校教育の中での乃木」を論じているが、それも国定教科書における乃木の取り扱いを説明し、横山健堂の『大将乃木』を引いて、当時の小学生の乃木観にふれているに止まる(大浜徹也『乃木希典』p. 271 ff.)
- 4) 三浦藤作「明治45年及大正元年度・教育小史」(『帝国教育』47号〔大正2年1月〕付録, p. 10)
- 5) 橋川文三氏は「乃木伝説の思想」において、「乃木が早くからある嘲弄のためのシンボルとして内在化していた」ことを指摘しているが(橋川文三『歴史と体験』p. 184)、この「内在化」が、乃木生前から世人の口の端にのぼっていた乃木伝説を通じてなされたことはいうまでもない。
- 6) 軍神乃木の虚像をあばいた2つの文学作品(司馬遼太郎『殉死』、福岡 徹『軍神』)に、乃木神社関係者が反発している旨の新聞記事(『朝日新聞』昭和45年7月5日)もあったが、そのために乃木が「忘れられた人物」でなくなるはずもない。なお乃木を扱った戦後の作品としては、上記のほか、戸川幸夫『乃木希典』『乃木と東郷』があり、同じく伝記・研究書には、松下芳男『乃木希典』、池田 論『代表的明治人』、大浜徹也『乃木希典』などがある。

I

石川啄木の著名な論文にちなんで、この時期が「閉塞の時代」として一般に理解されていることは周知のとおりであるが、この閉塞は K. B. Pyle が手ぎわよく分析しているように¹⁾、明治国家が設定した二つの教育目的——近代的科学・技術の習得と伝統的価値の保持——の葛藤の産物であった。それゆえ、葛藤を明瞭に意識していたのは先進的知識人たちであったが、問題はかれらだけに関するものではなく、天皇中心主義教育体制の全構

造にかかわるものであった。事実、教育の現場においても、知識人たちとは違った形においてではあるが、閉塞は重苦しく意識されていた。それは、「小学教員の暗黒面²⁾」と評されるような、教師の私生活面での退廃を産み出しただけでなく、天皇制教育の中心教科たる修身科の在り方に対する、末端からの批判をよび起した。例えば神奈川県の一教師は、乃木が自殺した大正元年9月の地方教育会雑誌に、次の文を寄せている。

修身教授の、小言教授にをはるもの多き、十年殆ど依然たるが如し。修身教授に人格なく熱情なく而して「継続」なく「恒久」なくして、如何でかよく所謂徳育の錬成を期すべけんや。

児童の個性を閉却し、児童の人格を蔑如し傲然として「爾等われに聞け」と。此の如くにして、児童如何んぞ聞くべけんや。否聞くこと能はざるなり。……徳教頽廃して社会解体の徴歴々として指点すべしとまで叫ばれつつある今日、之が根本的救治の直接責任者たるべき吾人教育者は、先ずこの修身教授に於て、一大改良を加へざるべからず。聞説らく、「児童の最も嫌ふ学科」は実に修身科なりと。吾人たるもの猛省する所なくして可ならんや³⁾。

批判は修身科教授法とその教授法を運用する教師の態度に主として向けられており、加えられるべき「一大改良」の内容についても積極的には語られていない。しかし批判されるべき教授法や態度を産み出したものが、ほかならぬ天皇中心主義教育体制そのものであること、しかも徳教頽廃・社会解体と呼ぶべき状況の出現が指摘されていることを考えるなら、先進的インテリゲンチヤのみならず、天皇主義教育体制の全体系が、突破し難い閉塞に陥っていたことがうかがわれるであろう。

色川大吉氏は、明治43年の第2期国定教科書は「全天皇制精神構造のみごとな展示場」であって、この教科書による「教育の力が“精神構造としての天皇制”の支配を仕上げていった⁴⁾」としている。天皇主義教育体制が制度的に確立されるのが1890年前後であることは周知のとおりだが、色川氏はいわば用意された器に水をみだし、制度に魂を吹きこんだものが第2期国定教科書だと見るのである。この見解に従えば、明治末期は天皇制教育が一つの絶頂に達する時期ないしは完成の時期と規定せられることになるが、この時期に徳教頽廃の指摘が現場教師からなされねばならなかったということは、完成期に達した天皇制教育が、完成と同時に転落の途をたどり始めたこと、あるいは完成がすなわち閉塞にほかならなかつたことを意味している。

天皇制教育の閉塞は、現場教師によって指摘せられただけではない。文部官僚でさえもが認めざるを得ない、儼然たる事実であった。文部省普通学務局長・田所美治は、大正2年5月の横浜市教育会総会での講演において、閉塞を教育の形式化という面からおさえて、次のように述べている。

智徳体の円満なる発達は教育の本旨とする所なれど、其精神を失はば大隈伯の所謂形式的教育の弊に陥る。近時此弊増長せんとする傾向あるを以て文部省は常に形式を去って事情に適合する様にと注意せり。例へば中等教育に於て教授細目を発布する如きは、命令せずして参考として出ず。かくて教育實際家の十分なる活動を望まんとす。文部省豈人を拘束する事を好まんや⁵⁾。

ここには、文部省が「形式的教育の弊」を「増長」せしめてきたことに対する反省も、中等学校の教授細目でできることが小学校ではできない理由についての説明もなされていない。それゆえ、「十分なる活動」を望まれても「教育實際家」はおそらくとまどいを感じ

ざるを得なかったであろうが、文部官僚の希望や弁明とは別に、閉塞突破の声は「教育実家」の間で徐々に高まり始めていた。

及川平治の『分団式動的教育学』が出るのは 1912 年であるが、この年茨城県の農村教師は「教壇上の反省」と題する一文において、画一教授の弊を痛撃し、個性尊重教育の必要を力説している。

現在吾人の取りつつある学級教授は、少くとも三四十人、多きは七八十人まで、千差万別と云ふても良い位の児童を集めて、教授細目とか週録とか云ふ様なものに標準を置いて、予定の如くに教師は教授を進めて行くから、天資既に差ある児童をして益々差をつけて、所謂不第児低脳児と呼ばれる者の資格を造りあげるのではありはしないか。……蓋しこれは学級本位教授をした教師の制作物ではあるまいか。……児童の個性をよく観察して置いて、其等に対して適応する様な教授が欲しいと思ふ⁶⁾。

現場教師による類似の主張は、当時の教育雑誌にかなり数多く見出すことができる。広島県の一教師は、教師が児童を信頼せず、「恰も警官獄吏が悪漢に対するが如く、鈎索摘発を以て得たりとする」場合が多いことを指摘し、かかる態度は「誠に訓育上の障碍」であるとして、「児童本然の発性を補助し、善良正当なる方向を取らしむることを務むべし」と結論している⁷⁾。また神奈川県的女教師も、「将来を慮る国は一国の子供を尊敬する風がある」のに対し、わが国の家父長主義が「子供を疎外するのは非常に悪いこと」だと断じ、「新なる児童崇拜主義を鼓吹して、永劫に国家の隆盛を計りたい」と述べている⁸⁾。

天皇制教育をその基底において担う地方教師たちが、このように新教育待望の声を発していることは、天皇制教育が大きい転回点にさしかかっていることを意味するものであり、またかれらの声はやがて大正新教育運動の中に収斂されていくことになる。しかし前引の神奈川女教師が、児童中心主義を「国家隆盛」の手段としてとらえているのは、来たるべき大正新教育の性格と限界とを予示するものとも見ることができるが、それはまた天皇制教育体制の末端部に位置づけられた一般教師の、平均的意識構造を卒直に語るものでもあった。

ところで、この女教師も希求した「国家隆盛」のシンボリック的存在であった明治天皇が、1912 年 7 月、閉塞打開の見とおしもまだたたぬ時期に死去したことは、天皇制教育を精力的に推進してきた支配層にとっても、多数の教師を含む一般の国民にとっても、実に大きい衝撃であった。日本軍閥の創始者で乃木のボスでもあった元老・山県有朋は、明治天皇の死に際して「天つ日の光はきえてうつせみの世はくらやみとなりしけふかな⁹⁾」と弔歌を詠じたが、のちに新教育運動のリーダーの一人となる手塚岸衛も、「大君の御民とわれはほこりしに生けるかひなく思ひなりぬる¹⁰⁾」と、ふしぎにも山県の弔歌のころにかような痛苦の心情をよみあげている。この事実、共通シンボルの喪失による痛苦の共通経験がかなり広く存在したことを示しているが、それはやがて『教育時論』がいうマス・ヒステリー状況に転化して行く。『教育時論』は明治天皇死後一年間の社会状況を次のように概括している。

国民は精神の大異状^(ママ)を呈し大ヒポコンデリー、大ヘステリー^(ママ)に罹りたり。看よ、諒闇一年の間に

起りし社会現象は、何れかヒポコンデリーのならざる、いずれかヘステリーのならざる。さなきだに臣民は悲嘆の極に陥りたる折柄、又外国の新聞紙は先帝の崩御と共に日本帝国の将来を危ぶむ記事論説をすら掲載せり。政治家の殊にヒポコンデリーとなり、又ヘステリーとなりしも、良に以ありといふべきなり¹¹⁾。

乃木の自殺はこのマス・ヒステリーがまさに噴出せんとする瞬間に起った。閉塞打開の途を模索していた天皇制教育推進者たちは、ただちに乃木の「神秘的」¹²⁾ な自殺にその手がかかりを求めようとする。そして後に述べるように、乃木の自殺を教育上いかに「活用」すべきかが真剣に論じられる。どんな人間の死であれ、それを意識的に「活用」という発想がいかに破廉恥なことであるかという、ほとんど自明の理は、そこではふしぎにも忘れ去られていたのである。

注

- 1) K. B. Pyle: The New Generation in Meiji Japan. p. 200 ff.
- 2) 『教育時論』994号(大正元年11月25日)p. 38
- 3) 『神奈川県教育会雑誌』89号(大正元年9月)p. 35 f.
- 4) 色川大吉『明治の文化』p. 322 ff.
- 5) 『神奈川県教育会雑誌』98号(大正2年6月)p. 37. なお「大隈伯の所謂形式的教育」というのは、田所の前に講演した大隈重信が、「我文明の欠点」として、「形式に拘泥する弊」を指摘したことを指す。
- 6) 『教育実験界』30巻9号(大正元年10月)p. 65
- 7) 『芸備教育』96号(明治45年4月)p. 15
- 8) 『神奈川県教育会雑誌』75号(明治44年7月)p. 22
- 9) 岡 義武『山県有朋』p. 120
- 10) 『上野教育』299号(大正元年9月)p. 60
- 11) 『教育時論』1019号(大正2年8月5日)p. 1
- 12) 三宅雪嶺『同時代史』第4巻, p. 152

II

三宅雪嶺が後年「世人の意表に出」¹⁾ と評した乃木の自殺が、少なくともその直後においては世人から冷い意外感をもって迎えられたことは、すでに橋川文三氏が生方敏郎『明治大正見聞史』を引き、また尾佐竹猛の例をあげて明らかにしているところである²⁾。橋川氏がふれていない若干の事例をあげると、「乃木は嫌いだ」といいきり、後述のごとく、世間の激しい非難をあげた谷本 富は、自殺の報に接した際のことを次のように語っている。

自分が大将自殺の号外を受取った時は、恰度木戸侯の中秋の詩の事が関聯して、西郷南洲、月照上人の歌等について或知人に一書を認めて居た際であつたが、自分は号外を受取ると共に思はず筆を落して暫く茫然たる有様であつた³⁾。

この談話中の「或知人」とは、横山健堂だと推定される。横山は谷本からの書翰に「と書きつつある際、乃木大将夫妻殉死の号外に接し、喫驚、また一字一句を書くの勇なし」とあつたのを引いて、谷本が乃木自殺に先ず感動せずして驚いたといっていることを非難しているが⁴⁾、感動しなかったのは尾佐竹や谷本だけではない。日露戦争を乃木と共に戦

った奥保鞏元帥についても、「殆ど自刃の報を信ずる能はず⁵⁾」と語ったとも、「自殺の報を信ぜず、説明を聞くと顔色真青になり、全く喪心の体にて寢室に端座⁶⁾」したとも、報ぜられている。また神奈川県のある教師も、乃木自殺直後に乃木を手放して讚美し得なかったことを「顧みて唯々慚愧の情に堪へざるを覚ゆるのみ」とのちに自己批判している⁷⁾。この三者の反応はまったく同一ではないが、乃木の自殺に意外感を抱いており、それが讚美や感動とはまったく異質のものであったという点では共通している。

個人レベルでの意外感も、群集レベルでは興奪と化する。大浜徹也氏は、乃木自殺の報に湧く民衆を描いた『東京朝日新聞』のルポを紹介しているが⁸⁾、『大阪毎日新聞』も「満車皆泣く」という見出しで、類似のルポ記事をのせている。

14日の朝まだき、百廿余名を乗せた満員の京阪電車が天満橋を出る一刹那、我社の乃木大将夫妻殉死の号外が投込まれた。「エ、乃木大将が自殺した」「自殺やない、殉死や」「エッ、奥様もか？」百余名の乗客は異口同音に乃木大将々々と呼んで茫然たる許り。……一人の老婆は「乃木大将が死にハッタか」と胸轟かしたる様子にて声高く読経を始め、前後を打忘れたる有様に乗客何れも異様の感に打たれて、大将最期の光景までまざまざと眼の前に見る心地してひた泣きに泣く⁹⁾。

まさにマス・ヒステリーの光景であるが、乃木自殺が始めて報ぜられた9月14日以降10日以上にわたって、各新聞は乃木讚美記事にほとんど塗りつぶされ、マス・ヒステリーはいよいよかき立てられる。乃木を模倣する自殺者が続出したのもふしぎではない。『東京朝日新聞』は乃木にならう自殺者を「偽乃木の続出」と皮肉ったが¹⁰⁾、乃木自殺に比較的批判的だった『大阪時事新報』までが、ノイローゼによる自殺者を「先帝に殉じたもの」として、「短刀を以て割腹し咽喉を貫きて見事に自殺」したと推奨的口吻をもって報じている有様である¹¹⁾。

各新聞がきそって掲載した乃木讚美論は、たいてい「各界名士」の談話記事であるが、内容的に大別すると、(1) 乃木の自殺そのものの讚美論、(2) 乃木の自殺の社会的効用論、(3) 乃木の人物讚美論に区分できる(同一人の談話が二つ以上の類型にわたっていることもある)。教育界・思想界のオピニオン・リーダーたちの意見を主に、類型別に主要な讚美論を紹介すると、先ず(1)に属するものとしては、旅順戦の責任をとったとする大隈重信¹²⁾、高田早苗¹³⁾、井上哲次郎¹⁴⁾、旅順戦に限らず広く責任の自覚の結果とする福原鐐二郎(文部次官)¹⁵⁾、武士道に精神に合致するという新渡部稲造¹⁶⁾、鬱屈した正気の突発したものと見る杉浦重剛¹⁷⁾などがある。(2)としては、沢柳政太郎¹⁸⁾、三宅雪嶺¹⁹⁾、菊池大麗²⁰⁾、谷本 富²¹⁾、福本日南²²⁾、杉浦重剛¹⁷⁾、福原鐐二郎¹⁵⁾などが、社会に対する「清涼剤」「刺激剤」「活教訓」としての乃木自殺の効用の大なることを語っている。(3)は10月以降教育雑誌などでさかんに論じられるが、新聞談話としては、井上哲次郎が乃木を節操の人とし¹⁴⁾、松井安三郎(学習院主事)が文武兼備の人としている²³⁾のが目につく程度である。

もっとも、各紙が掲載した「名士談」の中には、必らずしも乃木讚美に終始していないものもあった。後述の、谷本 富の乃木批判は有名だが、そのほか部分的な自殺批判を展開した人としては、慶応の鎌田栄吉、早稲田の浮田和民がある。鎌田は、乃木の主観より

すれば自殺は「赤誠の披歴」だろうが、「一般世人に契むる程の權威を有するものに非ず」と、ひかえ目な批判を試みている²⁴⁾。浮田は、『東京朝日』に境野黄洋が乃木自殺は「情に於ては大に尊敬の意を表すると共に、理に於ては遺憾ながら之を取らず²⁵⁾」と書いた説に賛意を表し、乃木の「最期は悲惨で批評するに忍びない²⁶⁾」と結んでいる。沢柳の発言もかなり微妙で、『読売新聞』によれば乃木自殺を無条件に「社会の清涼剤」として讃美しているごとくであるが¹⁸⁾、『時事新報』に見える彼の談話には、「將軍の生は、今回の死より尚大なる裨益を国家に齎らせるの深かりしやは図り難きも、其自殺に依て国民に刺激を与ふること決して稀少に非ず²⁷⁾」と、とりようによっては「乃木は生きて益なき人だ」ということを婉曲に述べているようにも解せられる部分が含まれている。どちらが沢柳の真意であるかは不明だが、いずれにせよこうした部分的・消極的批判論は、手放しの讃美論に完全に圧倒されている感が深い。

教育界もまた、この乃木讃美の大波にすっかりまきこまれている。その状況を若干の地方教育会雑誌についてみると、『都市教育』（東京市）は大正元年 10 月号に乃木追悼の漢詩²⁸⁾、11 月号に仏教学者・村上専精の、軍人勅諭・教育勅語・戊申詔書の実現した人は乃木だとする論説²⁹⁾をのせている。『神奈川教育会雑誌』は 10 月号巻頭に会長の乃木追悼文、文芸欄に俳句のほか、乃木の遺書、生前の乃木に出会ったことのある一教師の乃木讃美論などを掲載している³⁰⁾。『上野教育』（群馬県）は 10・11・12 月の 3 か月にわたって、乃木追悼の和歌・詩をのせ³¹⁾、『信濃教育』（長野県）の 11 月号³²⁾、『芸備教育』（広島県）の 10 月号³³⁾には、それぞれ会員の筆になる乃木讃美論が掲載されている。中央の教育雑誌では、『教育時論』（開発社）がいち早く 9 月下旬号に、湯本武比古の乃木讃美論のほか、乃木の略伝、各新聞紙所載の「名士談話」の抜萃などをもって 20 ページの乃木將軍特集を組んだが³⁴⁾、10 月以降は論説や投稿の和歌・漢詩をほとんど毎号掲載³⁵⁾、12 月中旬号には琵琶歌「乃木將軍」までのせている³⁶⁾。『帝国教育』（帝国教育会）、『教育界』（明治教育社）、『教育学術界』（大日本学術協会）、『教育実験界』（東京育成会）、『日本之小学教師』（国民教育社）、『小学校』（同文館）、『教育』（茗溪会）なども大同小異で、さまざまの乃木讃美の論説のほか、読者投稿の乃木追悼の和歌・漢詩などで誌面を埋めている。地方教育雑誌の中には『秋田県教育雑誌』のように、まったく乃木を黙殺したものもあったが³⁷⁾、それはむしろ珍しい例外に属する。多くは上記のごとく乃木自殺讃美の論説・和歌・詩などをのせているわけだが、その論説はたいてい中央の教育雑誌や「名士談話」にそのまま同調ないしそれを増幅したものにすぎず、オリジナリティのある意見はみあたらない。全般的な乃木讃美の風潮にのまれ、地方教育界の中央追随姿勢を改めて実証したに止まるというべきであろう。

乃木讃美のマス・ヒステリーは、9 月 18 日の乃木の葬儀においてピークに達する。この日、青山墓地周辺に集まった群衆は 15 万³⁸⁾とも、12 万ともいわれるが、その中には動員せられた多数の小・中学生もあった³⁹⁾。塚田清市によれば、葬儀以後も乃木邸および墓地を訪れる人がすこぶる多く、写真・絵葉書を売る露店が出るという有様で、しかもこうした雑踏ぶりは翌年 3 月ごろにもなお見られたという⁴⁰⁾。乃木ブームがなかなか退潮に

向わなかったことを示しているようであるが、『万朝報』によると、葬儀当日と同じく多数の小学生が動員されていることが判明する。9月25日に同紙記者が確認した分だけで、小学校7、幼稚園1、つごう2,200人が教師に引率されて乃木の墓地を訪れている⁴¹⁾。学校が乃木ブーム持続に相当の役割を果たしていることは否定できない。教育界は乃木讃美のマス・ヒステリーにまきこまれることによって、逆にそれを昂進させる結果に陥っているのである。

乃木讃仰の昂じた結果、その遺品を手に入れようと狂奔する学校もあった。『東京日日新聞』はその様子を次のように伝えている。

世界の偉人乃木將軍を慕ひ、第二国民の薫陶に資せんとして、各小学校の校長連は彼の英国に於けるネルソン將軍の遺例に倣ひ、手袋靴下衣服の裂地等何品に限らず將軍在世の折の所持品の記念別けを受くるに若かずと、東京市長又は市教育課に請願する者頗る多き由……⁴²⁾。

この *feticism* は、教育界その他で永年にわたって天皇の写真が礼拝対象たらしめられてきたことと、おそらく無関係ではないであろうが、それにしても「校長連」の行動が常軌を逸していることは明らかである。『東京日日新聞』も、遺品を各学校にわかつべきではないとする、東京高師の佐々木吉三郎の談話を掲載して、校長たちの行動を間接に批判しているのである。

このように教育界は、子どもの動員や遺品の獲得に狂奔したのであるが、その間教師の本来の仕事である教室内の指導において、乃木はどのように扱われていたのであろうか。『万朝報』は、「各種学校長の談話を綜合」すると、小・中学校では乃木自殺を讃美する指導が行なわれ、かつそれがかなり成功していると報じている。すなわち、小・中学校の「生徒は頭脳單純にして未だ斯る複雑なる事件を批判する迄に円熟」していないので、乃木の自殺は「彼等をして益す大將の至誠に服すると共に至尊稜威の絶大なるを感銘せしむる外、何等の余念をも惹起せしめ」ない指導が奏功しているというのである⁴³⁾。しかし『大阪時事新報』所載の、大阪の一小学校長の談話によると、教師が乃木自殺の取り扱いにすこぶる苦慮していることがうかがわれる。すなわち同校長は、訪れた記者に次のように語っている。

何分未だ思想の健全でない子供の事として、迂闊に殉死といふ事を褒めて語る訳にも行かず、さりとて此場合此殉死を貶す訳にも行かずしましたので、殉死といふ事に就ては何事も語り聞かせず、単に將軍の逸事を語り、若しも斯うした忠義の將軍が此際死なずに尚生き永らへて今上陛下に忠節を尽されたならば最も可かったといふ意味で語りました事で、生徒の感想等も未だ聞いて居りません⁴⁴⁾。

ここでは『万朝報』記事とは反対に、乃木自殺の消極的批判さえなされているわけだが、『万朝報』がいうような自殺讃美の指導が成功した例は、あったとしても非常に稀れだったのではないかと思われる。それは当の『万朝報』自身が後に「各学校訓話に於ては、大將の自殺を如何に説明すべきかは、目下各学校の疑問とせる所にして、文部省に伺出る者さへ多き由なるが……⁴⁵⁾」と述べていることから明らかであろう。

乃木の自殺を教室内で讃美することに教師がためらいを感じ、その取り扱いに苦慮した

のは、上記大阪の校長がいうような子どもの「思想不健全」(理解力不十分)のせいではなく、乃木自殺讃美論の氾濫にもかかわらず、そしてまた教育界が乃木讃美のマス・ヒステリーにまきこまれていたにもかかわらず、教師を含む多くの人びとがその意識の底に、自殺は讃美するべきでないという健全な良識の声を聞いていたからであろう。つまり、「世論」化してしまった自殺讃美論と健全な良識とのジレンマが、乃木の自殺について子どもに何を教えたらいいかという問題を産み出したのである。

乃木自殺をどう扱うかは、現場教師だけでなく、文部省にとっても厄介な問題であったようである。乃木の自殺は取りあつかいによっては、前にふれたごとく、天皇制教育の閉塞打開のきっかけとなる可能性をもつ問題であっただけに、天皇制教育推進の責任機関たる文部省としては、かえって慎重にならざるを得なかったのであろう。後述のように、乃木伝説が乃木神話に切りかわっていく過程でもあり、文部省としては生まれつつある乃木神話の定着状態をある程度見届けた上で、最終的な方針を出す意図であったようである。『報知新聞』はこの間の事情を次のように報じている。

文部当局者は国民教育の為に、殉死に対する解釈の標準を明にし、其の抛る所を天下に示して、子弟の教育に惑ふ所無きを期するは当面の急務たる可きも、聞く所に抛れば長谷場文相は、乃木將軍の事に関しては一切口を緘し、責任ある質問に対しても未だ賛否の態度を明かにせず。人心の沸騰、子弟の感情、之を趨くが儘に任じ、輿論の帰趣を窺ひて荏苒日を過しつつある由⁴⁶⁾。

この『報知』の記事が出た翌9月21日、福原文部次官の乃木自殺についての談話が、個人的意見という形で各紙に発表されている。福原談話は先ず、乃木自殺を殉死でないと断定する。そして前にふれたように、乃木の死は責任の自覚に発しており、「男子は自己の本分を全うするためには一死決して辞すべきにあらずとの教訓を実際の事実として示されたるもの」で、「世に対する活教訓」であるとしている⁴⁷⁾。あまり歯切れのよくないこの談話はたちまち各紙の批判の好餌となり、『報知新聞』は、乃木自殺を殉死でないと断じるのは乃木の忠誠心を見捨てるものだとし難し⁴⁸⁾、『東京日日新聞』は、責任を死によって果すべきだとするのは一種の自殺奨励論だと批判した⁴⁹⁾。こうした批判の可否はともかく、福原談話が学校における乃木の取り扱い方に全然ふれていないのは、現場で苦慮している教師たちにとっても、はなはだ不満であつたろうと思われる。

福原談話でも不明確なままだった文部省の乃木取り扱い方針は、その翌21日の『東京朝日新聞』によれば、「文部当局者の言」という責任主体をあいまいにした形で、一応打ち出されるに至っている。『朝日』は、「教材としての乃木將軍——文部当局の方針」という見出しのもとに、乃木の扱い方について「教員中には種々の疑問を抱き居る向きも尠からず、其筋の指示を期待しつつある模様なり」と報じたのち、次のように述べている。

文部当局者の言に依れば、若し疑問の点に付、伺ひ出づる者には特に指示すべきも此際文部省として取立てて訓示等を発すること無かる可く、一代の偉人たる故將軍の事情に就ては、教育者たる者は各自生徒に対し適宜講話をなし国民子弟の訓育上遺漏ある可からざる筈なれど、自殺或は殉死に言及するは成る可く避くるを可とすとの事なり⁵⁰⁾。

自殺にはなるべくふれずに「適宜講話」をせよというこの「方針」は、前引『大阪時事

新報』の校長談話の前半とほとんど同じであり、問題の解決にはなっていない。文部省もおそらく自信がないままに、責任主体をあいまいにしてこの方針を出したのであろう。ところが、自殺をネグレクトしては乃木という人物の理解はできぬはずだとする『教育実験界』の批判⁵¹⁾のほかは、これに対する目立った反対意見は出ていない。文部省の「方針」の内容は、現場教師が疑問をいだきつつも実際に行なってきたことと、おそらく一致しており、それが文部省の「方針」として認められたのであるから、反対説の出る余地は少なかったのであろう。そしてこの「方針」は、乃木の扱い方の基本に事実上なっていたのである。(後のことになるが第3期国定教科書〔1918年以降〕では、乃木の逸話がかなり大幅にとり入れられるけれども、自殺についてはまったくふれられていない⁵²⁾)。

吉田態次の論説「如何にして乃木將軍の殉死を教育に活用する乎」も、上記「方針」の定着化に何ほどの役割を果たしたのではないかと思われる。吉田は文部省方針がなるべく避けよといっている殉死については、殉死そのものは是認できぬが乃木の場合は「至大なる誠忠の精神と至大なる道徳的勇氣と至大なる高潔なる性格とを發露」したものであるから、それについて「適当な教訓」をすることは有効だとしている。しかしそれを「修身教科書に記入して模範的行為とすることには同意し難い」といい、「講堂訓話の材料として大將の人格を兒童に知らしむる如きは蓋し裨益する所大」であり、「読本の材料として、大將の高潔なる性格を現はす他の事項を採用するが如きも私の喜ぶ所である」として⁵³⁾、文部省方針に賛意を表し、さらに第3期教科書における乃木の扱い方に通じる意見をさ述べている。責任主体不明確の形で出された方針も、こうした学者の賛成を得ることで、いよいよ確固たる方針として、固まって行ったのである。

しかし、自殺に重点をおかず乃木の逸話等を教材とするためには、「嘲弄のシンボル」でもあった生前の乃木像が、すっかり姿を改める必要がある。ところが、輕蔑・揶揄の要素を多分に含んだ乃木伝説は、かれの死後のマス・ヒステリー状況の中で、乃木神話に生まれ変わりつつあった。この点でも、文部省「方針」が定着して行く基盤はほぼ整っていたのである。

注

- 1) 三宅雪嶺『同時代史』第4巻, p. 152
- 2) 橋川文三『歴史と体験』p. 183 ff.
- 3) 『大阪毎日新聞』大正元年9月17日
- 4) 横山健堂『大將乃木』p. 229 f. なお横山によれば、谷本書翰には西郷の歌が引かれてあったといい、谷本談話と符合している。
- 5) 『報知新聞』大正元年9月15日
- 6) 『大阪毎日新聞』大正元年9月15日
- 7) 『神奈川県教育会雑誌』97号(大正2年5月)p. 23
- 8) 大浜徹也『乃木希典』p. 210
- 9) 『大阪毎日新聞』大正元年9月15日
- 10) 『東京朝日新聞』大正元年9月18日
- 11) 『大阪時事新報』大正元年9月19日。この自殺者は、『万朝報』によれば「脳病」, 『東京朝日新聞』によれば「憂鬱症」だったとされている(いずれも9月18日)。
- 12) 『東京朝日新聞』大正元年9月15日

- 13) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 16 日
- 14) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 18 日
- 15) 『東京日日新聞』ほか、大正元年 9 月 21 日
- 16) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 17 日
- 17) 『万朝報』大正元年 9 月 17 日
- 18) 『読売新聞』大正元年 9 月 15 日
- 19) 『報知新聞』大正元年 9 月 15 日
- 20) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 16 日
- 21) 『大阪毎日新聞』大正元年 9 月 17 日
- 22) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 17 日
- 23) 『万朝報』大正元年 9 月 15 日
- 24) 『時事新報』大正元年 9 月 17 日
- 25) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 15 日
- 26) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 16 日
- 27) 『時事新報』大正元年 9 月 17 日
- 28) 『都市教育』97 号 (大正元年 10 月) p. 48
- 29) 『都市教育』98 号 (大正元年 11 月) p. 36
- 30) 『神奈川県教育会雑誌』90 号 (大正元年 10 月) p. 26 ff.
- 31) 『上野教育』300 号 (大正元年 10 月) p. 112. 301 号 (11 月) p. 56. 302 号 (12 月) p. 86
- 32) 『信濃教育』313 号 (大正元年 11 月) p. 5
- 33) 『芸備教育』102 号 (大正元年 10 月) p. 1
- 34) 『教育時論』988 号 (大正元年 9 月 25 日) p. 29~p. 48
- 35) 『教育時論』991 号, p. 22. 992 号, p. 20. 994 号, p. 21. 995 号 p. 20
- 36) 『教育時論』996 号, p. 22
- 37) 『秋田県教育雑誌』は、大正元年 9 月号以降、明治天皇をたびたび取り上げているが (252 号, 254 号, 261 号), 乃木にはまったくふれていない。263 号 (大正 2 年 8 月) の秋田師範校長・山本宗太郎「諒闇後の教育」でも乃木を黙殺しており, 260 号 (大正 2 年 5 月) では、乃木批判で有名な谷本 富の小論「活学校活教授」を掲載している。
- 38) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 20 日
- 39) 横山健堂『大将乃木』p. 463 ff.
- 40) 塚田清市『乃木大将事蹟』p. 393
- 41) 『万朝報』大正元年 9 月 26 日
- 42) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 23 日
- 43) 『万朝報』大正元年 9 月 19 日
- 44) 『大阪時事新報』大正元年 9 月 23 日
- 45) 『万朝報』大正元年 9 月 21 日
- 46) 『報知新聞』大正元年 9 月 20 日
- 47) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 21 日
- 48) 『報知新聞』大正元年 9 月 21 日
- 49) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 22 日
- 50) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 22 日
- 51) 隈川 生「乃木將軍と国民教育」(『教育実験界』30 卷 12 号 [大正元年 12 月] p. 4)
- 52) 第 2 期国定教科書では、5 年国語に「水師營の会見」が出ているのみだが、第 3 期になると、「水師營」のほか、4 年国語、6 年修身に乃木が登場している (『日本教科書大系・近代篇』第 7 卷, p. 179, p. 420 f. 第 3 卷, p. 203)。
- 53) 『帝国教育』45 号 (大正元年 11 月) p. 63 ff.

III

乃木生前の乃木伝説をこんにち完全な形で復元することはかなり困難だが、乃木伝説に

おける乃木像が、旅順戦の「悲劇の将軍」という面と、「乃木式」という語で呼ばれた、奇矯・佻気・粗暴¹⁾の人というダブル・イメージをもって成っていたことは確かであろう。このうち「悲劇の将軍」像については、大浜徹也氏の明快な分析がある。すなわち大浜氏は、国民が日露戦争によってうけた苦痛と悲哀を、二人の子息を戦死させたかぎり同じく戦争被害者でもあった乃木の中に「倒立して投影」したところに、悲劇の将軍像が形成されたとしている²⁾。M. Jansen の言をまづまでもなく、乃木は「日露戦争のシンボル³⁾」とくにその悲惨と犠牲のシンボルとなったが、彼をかかえるシンボルたらしめた背景に、大浜氏の指摘するような国民の心理があったことは確かであろう。しかし第三軍司令官陸軍大将乃木希典が、ふつうの戦争犠牲者でなく紛れもない加害者であるという事実が儼として存する以上、日露戦争のシンボルとしての乃木像は、単なる「悲劇の将軍」レベルに止まることはできず、消し去りようのない国民の怨念の影をとどめたものとならざるを得ない。つまり、「悲劇の将軍」像の中に投影されるだけでは充たされきれない怨念が、屈折した形で乃木の中に像を結ぶところに、「嘲弄のシンボル」としての、いまひとつの乃木像が成立するのである。しかも乃木はその性格・行動の奇矯において、まさに揶揄・嘲笑の的たるにふさわしいものを十分にもっていたから、悲劇の将軍——乃木式というダブル・イメージは、比較的容易に成立し得たと考えられるのである。

ところが、乃木死後のマス・ヒステリー状況の中で、このような乃木像は急速に解体して行く。第一に、乃木自殺後おびただしい乃木美談が、関係者談話という形で国民の前に提示されたが、これによって従来の乃木伝説に見られた「嘲弄のシンボル」的側面は、すっかり色あせて行かざるを得なかった。提示せられた乃木美談の中には、それまであまり知られていなかったものも、以前には揶揄の対象となっていたような話材を、美談に再解釈したものもあったが、前者はもちろん、後者の場合も、死者に対する礼という気もちもあって、比較的すなおにうけとられた。第二に、悲劇の将軍というイメージも、当然内容が変わった。乃木が日露戦争における被害者だったということは、関係者談話や「名士」の乃木讃美論でもたびたび語られたけれども、悲劇性の中心は、7年以前の戦争で彼が払った犠牲という点から、彼の自殺という目前の事実の方に移行した。とくに彼の自殺が明治天皇の死に殉じるという形をとったため、乃木は日露戦争のシンボルから明治のシンボルへと昇格して行ったのである。

このように乃木伝説が解体して行く中で、乃木神話形成の素地がしだいに固められるのであるが、乃木伝説が神話にかわるために決定的な役割を果すのは、乃木の神格化である。周知のように乃木はのちに東京（旧乃木邸）と京都（桃山）で神社にまつられるが、乃木神格化の問題をいち早く提起したのは黒岩涙香である。彼は9月16日に発表した「乃木將軍の自殺を聞きて」と題する論説で次のように述べている。

乃木將軍の自殺が先帝に対し奉りての殉死なることは明白なり。殉死が今の国家の禁ずる所たることも明白なり。乃木將軍は先帝より大なる委託を受け居たることも明白にして、此自殺の爲に自分より其委託を放棄したることも明白なり。……而して將軍の自殺が何人の脅迫よりも出でずして単に自個の意思、自個の自由なる選択より出でたる事も亦明白なり。今日の教育主義は斯る事を是

と視るか否と視るか。……

人には自個の責任と云ふものあり。自己の責任を以て自個の生死（のみならず一切の事）を定む可し。此責任の爲めには時として——否往々に——国家の所望に衝突することも有るべし。国家に謀反することも有るべし。然れども今の国家は之を認めず。単に人民を一定の鑄型に容れ、其の自由の発展、自由の行動を奪ひ、思想の自由を奪ひ、単に治し易き御し易き柔順性を作らんが爲めに、教育の方針をまで其の通りに曲げ……国家至上、個人没却の主義を推し通さんとするなり。自個責任の上に立つ個人の正当なる自由行動を悉く邪視せんとするなり。今日までは其れにて通り来れり。然れども乃木將軍の自殺の如きをば、彼等は如何に視んとするか。乃木將軍をば忠君の人に非ずと云はざれば彼等の刃は自ら折るべし。……

乃木將軍は自個の責任を以て自個の生命をば自個の最良と思ふ方法に処分したり。然れども將軍の最良と認むる方法は、国家が最良と認むる方法と衝突したり。国家は之を賞せんとするか之を責めんとするか。若し責めるとすれば今までの、故意に誤まりたる教育の方針が此場合にも貫かるゝなり。若し賞するとせば、吾人の平昔唱ふる所の意見に投合し来るなり。

乃木將軍は、吾人の意に由れば、実に楠公以後の第一人なり。彼れは人たるよりも神なり。……彼れの死を決したるは楠公の死を決したるに同じ。彼れは、我が国人の忠君の心が、徒らに形式の美を飾るに流れて、実は精神的に泯滅せんとするを慨したりき。彼れは自ら死を以て我が精神を明かにするに非ざれば以て此頽波を支ふ可からざるを知りたり。彼れが真正に忠君なる愛国なる思念は、彼れをして形式に拘泥するを許さず、自殺を以て、精神的に痛烈に感化を遺すの一途に出でしめたり。……

知らず我が国家は如何にして彼れに酬い、如何にして彼れの赤誠を永く子孫後世に伝へんとするか。或は国家は其の僻みたる主義の爲めに何事をも為さずとするも、国民は自個の判断を以て何事をも為さずには止まざるべし。然らば国民は彼れを神として祭る可きか、然り、彼を神として祭らずんば復誰をか神として祭らんや。縦しや祭らざるも彼は神なり人に非ざるなり。……吾人は彼れと時代を同じくするに於て神と共に棲むの幸福を有したり。人にして彼れより以上に神なる者は在ること能はず。祭らずして如何に此の幸福を永久にするを得んや。実に乃木將軍は神にて在はしき。今日まではすぐれし人と思ひしに、人と生れし神にぞありける⁴⁾。

いささか長文にわたる引用をあえてしたのは、この乃木神格化論が、天皇制教育の閉塞突破についての、かなり重要な提案という意味をもっているからである。一読明らかなごとく、黒岩は決して単なる乃木讃美論を展開しているのではない。黒岩の所論でとくに注目しなければならないのは、次の三点であろう。(1) 黒岩は「国家至上・個人没却の主義」つまり在来の天皇制教育体制が、「自由なる選択より出」た乃木の自殺の前に、完全に破産を宣告せられたとする。「乃木將軍をば忠君の人に非ずと云はざれば彼等の刃は自ら折るべし。」黒岩もまた、時代が天皇制教育にとっての閉塞の時代であることを見ていたのである。(2) 閉塞の原因は、黒岩によれば「人民を一定の鑄型に容れ」る「教育の方針」そのものにある。とすれば閉鎖突破の途は、「国家の所望と衝突」しようとも、人それぞれの「自個の責任」を徹底的に尊重するほかはない。乃木は一身を犠牲にしてこのことを示した。「彼れが真正に忠君なる愛国なる思念は……自殺を以て精神的に痛烈に感化を遺すの一途に出でしめたり。」ここに、破産宣告をうけた天皇制教育を新たに再建する途がある。つまり「形式の美」をすてて「自個責任の上に立つ」「忠君の心」をうち建て

ることである。(3) かかる途を切り開いた乃木は、「人たるよりも神」である。それは古い天皇制教育体制下の神ではない。「国家はその僻みたる主義の為に何事をも為さ」ぬかもしれない。だから国民の手で乃木を神としてまつことは、新しい教育体制を築いて行くことにつらなる。「彼れを神として祭らずんば復誰をか神として祭らんや。」乃木は新しい天皇制教育体制の、いわば守護神なのである。

黒岩はこのように、乃木神格化論という形で、閉塞突破——天皇制教育の新転回の全プログラムを提示したのであるが、それは一言でいえば閉塞状況の中で窒息している国民の自発性を呼び戻し、それを天皇への忠誠に結晶させることによって閉塞を打開し、天皇制教育に転回をもたらすという構図であった。しかし自発的忠誠を転回軸として古い絶対主義天皇制教育に新しい生命を賦与し、乃木を自発的忠誠のシンボル化しようとするこの黒岩の構想は、もちろんそのままの形では実現しなかった。一篇の論説で現実が直ちに動き出すはずがないことは改めていうまでもない。その上、乃木を自発的忠誠のシンボル化することは、いわば乃木像の近代化であるが、乃木の経歴等から見てかなり無理がある。自発的忠誠を基軸とする方向への天皇制教育の転回(天皇制教育の帝国主義段階への再適応)の試みが、「新学校」や臨時教育会議でなされることは周知のとおりだが、それらはむしろ乃木像近代化とは結びついていない。

それどころか黒岩提案の乃木像近代化は、彼の論説をきっかけとして生まれた「軍神乃木」像の前に、かえって影がうすくなって行くのであるが⁵⁾、それにもかかわらず彼の論説が乃木神話形成過程においてもつ意味は、決して少なくはない。第一は、黒岩の論説が乃木神格化の動きの発火点となったことである⁶⁾。黒岩論説発表の翌9月17日には、福島中将が、乃木は「真に神様である」と語ったと報じられているが⁷⁾、おそらく黒岩論説の影響であろう。そしてこれ以後、乃木神格化の声がしだいに大きくなって行くのである⁸⁾。もちろんそれは、乃木を自発的忠誠の神としてまつれという黒岩の主張とは異なり、軍神乃木という形での神格化であるが、黒岩が提起した乃木像近代化が軍神乃木像の中でもまったく消え果ててしまっていないことは、注目してよい第二の点であろう。軍神乃木が「古武士的武將型⁹⁾」を脱しなかったことは確かであるけれども、そしてその限り乃木像の近代化は擬似近代化にすぎなかったことも確かであるけれども、古い武士道精神の具現者というだけでは、乃木神話は20世紀の日本の社会には定着し難い。だから乃木は近代的徳目の具現者として¹⁰⁾、あるいはボーイ・スカウトの理解者¹¹⁾、「新文明の吸収」に熱心な人¹²⁾として描かれるのである。

このように新しい乃木像が描かれる中で、在来の乃木伝説のマイナス面を現わす「乃木式」の語も、その意味を転換してくる。だから横山健堂も、乃木式とは簡易生活と厳格勇猛だといい、さらに「乃木式といふは、日本精神趣味の表現に、大將乃木の人格的色彩を帯ぶるもの、則ち是なり¹³⁾」と、乃木式の新定義を試みるのである。そして乃木式がその反対物に転化してプラスのシンボルとなり、奇矯が孤高に、街気が誠意に、粗暴が勇猛に転換するにともなう、乃木はまさに神とまつられるにふさわしい「理想的日本人の典型¹⁴⁾」とたたえられる。しかも、いったん乃木が「理想の日本人」だということになると、

次には逆に、「理想の日本人」たるにふさわしいさまざまな徳性が、乃木像に付加されて行く。女子学習院で乃木院長のもとに教壇に立った経歴をもつ大束重善は、教育者の学べき乃木の徳性として、謙遜・責任と労苦・思慮緻密・読書熱心の四つをあげ¹⁵⁾、井上哲次郎は乃木の七徳として、忠誠・質素・励精・謙遜・清廉・勇敢・仁慈を数えている¹⁶⁾。このように乃木の美徳を枚挙する方式は、学習院輔仁会編「乃木院長記念録」や長谷川正道の著書などでも採られていて、前者は 9¹⁷⁾、後者は 34¹⁸⁾ の徳目を列挙し、その徳目に該当する「美談」を記している。

大浜氏によれば、大正元年中に出版された乃木関係書は 28 に及び、昭和 17 年 (1942) までに、つごう 125 種に達している¹⁹⁾。これらの書物によって、おびただしい数の「乃木美談」がばらまかれているが、軍神乃木のイメージを傷つけるおそれのある材料は、もちろん注意深く秘匿されつづけた。青年期の乃木の退廃ぶりを示す日記のごときはその例である²⁰⁾。またこれらの書物、通俗教育講演会、あるいは講談・浪曲等の演芸を通じて国民に伝えられた「乃木美談」(すなわち乃木神話の構成要素)の中には、いかがわしいものが少なくなかった。塚田清市は「大将の逸事を述べる者が……極端なる事柄を捏造し、若くは無根の虚談を構へしを以て訛伝に訛伝を生」む状態になっていることを嘆き²¹⁾、桜井忠温も「講釈師が扇子から叩き出したウソ」が多いといっているが²²⁾、その桜井の著書自身が、長谷川正道によって、世人を誤解せしめる誤伝の例にあげられている有様である²³⁾。教師が書いた乃木讃美論の中にも、こうした訛伝や誇張にもとづいて乃木礼讃を試みているものが少なくない²⁴⁾。しかし、神話がそもそも虚構の産物である以上、乃木神話もまた、虚構に虚構を重ねる運命を免れ難かったのは当然ともいえよう。

ところで、乃木神話の形成過程で生じた注目すべき事件は、谷本 富の乃木批判事件であろう。ただし、彼の批判がたちまち圧殺され、翌年夏、谷本自身が京大教授の職を追われるに至る²⁵⁾ことは周知のとおりである。池田 進教授によれば、乃木批判は谷本鹹首の口実で、真因は彼が教官間の人間関係をこわす震源になったことだといわれる²⁶⁾。ここでは谷本鹹首やそれが一つのきっかけとなった沢柳事件に立ち入る余裕はないので、谷本の批判が投じた波紋と、乃木神話形成過程でもった意味とを検討するにとどめる。

谷本の乃木批判について先ず明らかにしておかねばならないのは、谷本が乃木の自殺をひとことも批判しておらず、かえって讃美しているということである。問題になった谷本談話²⁷⁾の初めの部分はⅡに引用したが、できるだけ正確を期するために、その他の部分を先ず紹介しておこう。「潔き立派な最期」という見出しの谷本談話は、「乃木さんの事かね、乃木さんは自分は一体平生余り虫の好かない人である。露骨に云へば甚だ嫌ひな人である」で始まり、「併し今度の事は実に何とも云へず深く感動したことであって、壮烈無比といって善い様に思ふ」とつづいている。次にⅡに引いた、号外を見た時の感想が述べられ、すぐ引きつづいて「併しそれについて起った感想は、誠に乃木大将としては潔き立派な最期であって、如何にも斯くあるべき事たるべく……」とあり、次に自分が乃木を嫌うのは乃木に銜気があるためだとして、三つの例をあげている。(1) 乃木がマグロの肉塊を軍刀で荒切りにし剣の尖に肉を刺して客にすすめたこと。(2) 那須野隠棲も老西郷気取り

であること。(3) 善通寺師団長時代および満洲旅行の際夫人を追い帰したこと。そして語を転じて、「併し今回の自殺は恐らく此の銜気に出でたるものには非るべく、必ずや其平素主義とする処の武士道に出でたるものであって、所謂言行一致少しも虚偽なかるべしと信じて、平生虫の好かざりしに拘はらず、茲に改めて深く感嘆する処である」と三たび讃美のことはを述べているが、しかし「乃木式」そのものには賛成しない、乃木は一徹で「才学技術において卓越でない」と批判している。ついで、乃木の人相・骨相を評して「下賤の相に近い」とし、さらに「心靈の修養の如何にも乏しき」ために「憤慨遂に身を殺したるのである」と述べている。そして最後に「総体より評せば大将の如きは人間としては固より第一流の智識を備へたる人とは云へない」とし、さらに、殉死は賞讃するべきでないが乃木の死は「時勢の悪風を矯正」するに功があるかと述べ、乃木の死には「多大の同情を表し深く敬意を払ふ」と結んでいる²⁸⁾。

このように乃木の自殺自体を全然非難していないにもかかわらず、谷本は世論の攻撃、というよりも民衆の反感の前に立たされることになる。『万朝報』によると、彼のもとには数十通の脅迫状が舞いこみ、夜間彼の家に投石するものもあったという²⁹⁾。また彼の担任する教育学専攻には新入生が一人もなく、「平素(谷本)博士に慊らぬ教授間に放逐の議あり」とも報ぜられている³⁰⁾。新入生がないというのはデマであるが、教官内の谷本追放論は、もし誤報でなければ、前記池田教授の説を裏書きするものといえる。谷本についてはいろいろのデマが流れたようで、10月の京大火災の際にも、彼が焼死したといううわさがあったといわれている³¹⁾。

谷本談話が民衆の反感を買ったにもかかわらず、正面から彼の乃木批判を反駁する論説や談話は(少なくとも管見の範囲では)みあたらない。『京都日出新聞』所載の「京都大学某氏談」に、乃木自殺を「銜気に出でたりと評するは、苦々しき極み。……世に銜はん為一身を棄つる如きことは断じて出来得べきものに非ざるなり³²⁾」とあるのが、谷本の名をあげていないが、やや批評めいた批評といえる(ただし論点はずれている)。正面切った反駁も出ないままに、非難の声だけはしだいにひろがって行ったらしく、11月には谷本の出身地の香川県教育会が、「本会員谷本 富氏の乃木大将自殺に対する論評は国民教育の大精神を破壊するものにして本会の体面を汚瀆するものと認む。仍って今回定款第十四条に依り除名せられんことを望む」という「建議案」を商議員会の満場一致で可決している³³⁾。

反駁がなかったのと同じく、谷本談話に対する賛成意見もほとんど出ていない。『教育時論』は香川教育会の谷本除名を「激越に失したり」と評し³⁴⁾、仏教学者・高島米峰は『東京朝日新聞』に投書して、乃木自殺批判者を非国民とののしり、その言論を圧迫するのは「世の学者をして曲学阿世の徒たらしめんとする」ものだと言ったが、谷本談話そのものについては、「乃木の平常を知らぬ愚説」と酷評している³⁵⁾。川村五峰が「(谷本)博士の論評は誠に正々堂々たるものにして聊か不穩不健全の言句あるを発見せず³⁶⁾」と述べたのがわずかに谷本賛成論に数えられるくらいであろう。

谷本に対するまっこうからの反駁が出なかったのは、谷本の批判が乃木自殺の批判では

なく、生前の乃木の性格や行動、いわゆる「乃木式」への批判だったからであろう。つまり、谷本を反駁するためには、今まで軽蔑・揶揄の対象になっていた「乃木式」を擁護しなければならないことになるが、マイナス・シンボルとしての「乃木式」のイメージは、乃木死後のマス・ヒステリー状況の中で影がうすくなっていたにしても、9月・10月の時点ではまだプラス・シンボルへの転化を完了していない（横山の『大将乃木』が出るのは11月中旬である）。だから谷本に対する非難も、彼の「乃木式」批判を乃木自殺批判にすりかえた上で、行なわれているのである。前記京大某氏談もそうであるし、「乃木大将の自殺に対する論評」を非難した香川教育会の場合も同様である。このすりかえが故意のものであったか否かは疑問だが、少なくとも前記京大某氏が関西の新聞に掲載された谷本談話を読んでいなかったとは考え難い。いずれにせよ民衆の間では、谷本が乃木の自殺を批判したと受けとられていたのである。このことは、三浦藤作が「冷やかなる道義を以て大将の死を律せんとする者なく、之を非認せんとしたる京都大学教授文学博士谷本 富の言が激烈なる輿論の反駁を受けたるを見ても、国民思想の趨勢を知り得べし³⁷⁾」といっていることからもうかがわれる。ただし三浦がいうように、谷本が「輿論の反駁」を受けたのではない。谷本の「乃木式」批判を圧殺したものは、三浦のことばを借りれば「国民思想の趨勢」より正確に言えば、当時の社会をおおうマス・ヒステリーそのものであった³⁸⁾。谷本擁護論や谷本への賛成意見が出難くかったのは当然であろう。

消極的とはいえ乃木自殺そのものを批判した境野黄洋や浮田和民などの場合よりも、谷本が受けた非難は大きかったように思われるが、それは彼が、乃木讃美論の氾濫にともなって薄明の中に消え去ろうとしていた嘲弄対象としての「乃木式」を、今一度明るみに引き出そうとしたからであろう。つまり谷本の乃木批判は、マイナス・シンボルとしての「乃木式」をプラス・シンボルに転化することを阻止し、ひいては乃木伝説の乃木神話への脱皮を妨げる機能をもっていたのである。だから「国民思想の趨勢」が乃木神話形成の方向に急速に進んでいるかぎり、谷本は非難の集中砲火をあびねばならなかったのである。そして谷本に非難を集中することでマス・ヒステリーはいよいよ昂進し、乃木神話形成への途は大きく開かれて行った。谷本はいわばスケープ・ゴートとして、神となった乃木の祭壇に捧げられたのである。

以上、乃木神話形成をめぐる若干の問題を眺めてきたが、最後に乃木神話ないし乃木神格化の教育史的意味にふれて、この小論の結びとしよう。

黒岩涙香が提起した形での乃木神格化は成就せず、したがって形成せられた乃木神話が天皇制教育の閉塞突破の直接の端緒となることはなかった。しかし少なくとも、それが天皇制教育の転回への途を整える役割を果たしたことは、承認せられてよいであろう。つまり乃木の「軍神」としての神格化は、来たるべきミリタリズムへの途を準備するものであり、乃木神話は、新教育胎動期たるこの時代の、もう一つの側面を開示するものといえるのである。武者小路実篤は、『白樺』大正2年5月号で乃木神格化を論じ、「どうせ力のない神様だ³⁹⁾」と評した。確かにそういう面はあるが、この「力のない神様」の誕生

から 30 年のちには、大ぜいの「軍神たち」が生まれている事実を、決して看過するべきではないであろう。

注

- 1) 乃木の戦死した 2 子息の学友で、旅順戦を乃木の部下として戦った長谷川正道も、彼の青年時代 (1905 年ごろ) に「乃木式」とは、粗暴・粗略を意味したと後年語っている (長谷川正道『敬仰乃木將軍』p. 250)
- 2) 大浜徹也『乃木希典』p. 110
- 3) M. B. Jansen: *Changing Japanese Attitudes Toward Modernization*. p. 78. (細谷千博編訳『日本における近代化の問題』p. 83)
- 4) 『万朝報』大正元年 9 月 16 日
- 5) 『万朝報』大正元年 9 月 17 日号は、黒岩論説の「一反響として」掲載するという注をつけて「明治の“軍神”乃木大将」と題するかなり長文の投書をのせている。「乃木を自発的忠誠の守護神とせよ」という黒岩の呼びかけは、「軍神乃木」をもって応えられたのである。
- 6) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 16 日号には、「国費を以て乃木神社を建設せよ」との投書が掲載されている。黒岩以外にも乃木神格化論者があったわけだが、社会に大きい影響を与えたのはもちろん黒岩の論説である。
- 7) 『報知新聞』大正元年 9 月 17 日
- 8) 『大阪毎日新聞』(大正元年 9 月 17 日) は、乃木を「神人」(しんじん) と呼び、『東京日日新聞』(大正元年 9 月 18 日) は「軍神」と呼んでいる。また『大阪毎日新聞』(大正元年 9 月 19 日) 硯滴 (コラム) は、乃木神社建設を望む旨の投書が続々舞い込んだと述べている。『大阪時事新報』(大正元年 10 月 15 日) によれば、10 月 3 日国学院大学で行なわれた皇典講究所主催の乃木追悼会で、乃木神社創立が決議されている。こうした動きとは別に、大正 2 年 1 月乃木夫妻をまつる小社が、乃木関係者の手で旧乃木邸内に建てられている (塚田清市『乃木大将事蹟』p. 392 f.)
- 9) 松下芳男『乃木希典』p. 215
- 10) 乃木は第 3 期国定教科書 (6 年修身) には「清廉」(公私の別)、第 4 期 (5 年修身) には「公德」という、近代的徳目の具現者として登場している (『日本教科書大系・近代篇』第 3 巻, p. 203, p. 298 f.)
- 11) 学習院輔仁会 (編)『乃木院長記念録』p. 71 ff. p. 410
- 12) 桜井忠温『將軍乃木』p. 174 ff.
- 13) 横山健堂『大将乃木』p. 518
- 14) 『東京日日新聞』大正元年 9 月 18 日社説
- 15) 大東重善「大正の教育者の乃木大将に学ぶべき事項」(『日本之小学教師』169 号 [大正 2 年 1 月] p. 73 ff.)
- 16) 井上哲次郎「乃木大将と国民教育」(『小学校』14 卷 4 号 [大正元年 11 月] p. 2 ff.)
- 17) 学習院輔仁会 (編)『乃木院長記念録』p. 505 ff.
- 18) 長谷川正道『敬仰乃木將軍』p. 96 ff.
- 19) 大浜徹也『乃木希典』p. 287
- 20) 乃木の日記のうち公表されたのは、明治 27 年分 (『乃木將軍日記』と題し昭和 11 年刊行)、明治 34~36 年分 (『農事日記』と題して、学習院輔仁会 (編)『乃木院長記念録』[大正 3 年] に付載) が主なもので、青年時代の日記は塚田清市『乃木大将事蹟』に一部引用されているが、全文が公刊されたのは昭和 18 年である。
- 21) 塚田清市『乃木大将事蹟』p. 301
- 22) 桜井忠温『將軍乃木』p. 201
- 23) 長谷川正道『敬仰乃木將軍』p. 329 f.
- 24) その一、二の例をあげると、長野の一教師は明治天皇の病中乃木が絶食したと書き (『信濃教育』313 号 [大正元年 11 月] p. 5)、神奈川の教師は、乃木が子どもに答礼したことを「仁愛の徳」の現われだと、オーバーな表現をしている (『神奈川県教育会雑誌』90 号 [大正元年 10 月] p. 28)

- 25) 『京都大学 70 年史』 p. 54
- 26) 池田 進「敗北の教育学者」(『京都大学教育学部紀要』 V p. 162)
- 27) 谷本談話は当時の新聞に掲載された「名士談」のうち、最も長文のものの一つで、新聞 1 ページ 8 段の中、約 5 段にわたっている。
- 28) 『大阪毎日新聞』大正元年 9 月 17 日
- 29) 『万朝報』大正元年 9 月 20 日
- 30) 『万朝報』大正元年 9 月 23 日
- 31) 『京都日出新聞』大正元年 10 月 29 日、落し文(読者投書欄)
- 32) 『京都日出新聞』大正元年 9 月 20 日
- 33) 『日本之小学教師』168 号(大正元年 12 月) p. 93
- 34) 『教育時論』994 号(大正元年 11 月 25 日) p. 46
- 35) 『東京朝日新聞』大正元年 9 月 25 日
- 36) 『新仏教』13 卷 12 号(大正元年 12 月) p. 1261
- 37) 三浦藤作「明治 45 年及大正元年度・教育小史」(『帝国教育』47 号〔大正 2 年 1 月〕付録, p. 3)
- 38) 川村五峰は香川教育会の谷本除名の背後に「地方官憲の圧迫」を疑がっているが、確かめ難い。(『新仏教』13 卷 12 号, p. 1261)
- 39) 武者小路実篤『若き日の思索』(角川文庫版) p. 175 f.